

# 文字の音韻に該当する術語は何か

正 木 好 弘

## 一

前号で、「字体」という術語が明晰さや判明さを欠く用法が行なわれていることから、どう考えるべきかを示した。その記述の中で、山田俊雄の「音韻と音声との区別における音韻に擬せられるのが字体である。」（『国語学大辞典』「字体」の項の記述）という指摘を妥当としていた。しかし、本当に妥当と正しいのか疑念を抱くに到り、この問題を考えてみることにした。

そもそも音韻という術語の定義も明晰で判明かというところ、そういう状態とはいえない状態である。『講座 国語史』（大修館書店刊）の第2巻（一九七二年刊）は「音韻史・文字

史」とされていた。ということは、このシリーズの担当者は文字を音韻に該当する術語ととらえていたかのようである。

また『岩波講座 日本語』（岩波書店刊）では第5巻（一九七七年刊）を「音韻」とし、第8巻（一九七七年刊）を「文字」としていた。これも同様の扱いである。はたしてこれでもいいのだろうか。文字は具体的現象として可視化されたものである。それに対して、音韻は抽象的心象であり可視化されないものである。この点のみでも、この両者を互いに該当するものと扱うことは問題ではないか。そこで、文字の音韻に該当する術語は何か、それを字体と認定することが妥当かを点検する必要があると感じた。作業としては、学会編纂の辞典での「音韻」の定義を点検したうえで、私見をまとめることとした。参照したのは、〔A〕『国語学辞典 訂正15版』（国語学

会編、一九六七年 東京堂出版刊）、〔B〕『国語学大辞典初版』（国語学会編、一九八〇年 東京堂出版刊）、〔C〕『日本語学大辞典 初版』（日本語学会編、二〇一八年 東京堂出版刊）の三冊である。

## 二

〔A〕では、「音韻」の項を金田一春彦が執筆を担当し、次のように記していた。

《言語・音声》 いちいちの言語体系を形作る記号としての音。甲が叫ぶ「犬がいる！」ということばの音（＝具体音声）と、乙が叫ぶ「犬がいる！」ということばの音とは、正確には同一ではない。われわれはその違いを容易に指摘できる。が、違いはあるが、われわれは日常その二つを、同一の《犬がいる》ということばだとして受け取っている。それは、この二つの音そのものが似ているというだけではなく、具体的に耳に聞える「犬がいる！」という音の中核として、《イヌガイル》という共通の音が抽象されるからと考えられる。つまり、甲と乙とは共通の記号を使っているわけであって、それがたま

たま甲・乙両人の生理的、物理的あるいは心理的な事情の違いに依じて、記号以外の音的要素が加わり、異なる二つの「犬がいる！」という音として実現するのだと考えることができる。このように解釈する場合、一回一回の具体的な「イヌガイル」という音を音声（別項）と呼ぶのに対して、その中核にあると解釈される《イヌガイル》という抽象的な音を音韻と呼ぶ。音声は〔 〕の中で包んで表記されるに對し、音韻は〔 〕の中、または／＼の中に包んで（横書きに）表記されるのが慣例である。【特質】一つの語の音韻は、原則として、音韻論的音節、またはモーラ（別項）に分節され、それらは、さらに音素（別項）に分析される。また日本語を始め多くの言語では、一つの語の外形は、それらの音素の連結とアクセント（別項）との複合したものであり、アクセントに対して、音素の連結の方だけを、音韻と呼ぶことも多い。また、音韻という語を、一つの語の外形を分析して得られる単位を呼ぶ術語として用いることも多い。このように見る時は、日本語の音韻は、音素とアクセント素（↓アクセントの型）との二種の総称となる。音韻の本質は、ソシユール（別項）のような、言語体系を心

理的事実と見る立場に立てば、一種の心理的事実になるが、ブルームフィールド（別項）のような、言語をマテリアリスティックに見る立場に立てば、言語的事実を説明するためのフィクションだということになる（↓音声表象）。【付記】音韻は、学者によって、ここに掲げた以外の意味にも使われる。(1)漢字音の異称として。(2)広く言語現象のうちで音的部面の総称として、語彙・語法の対として。(3)フォネームの訳語として、つまり、音素の意味に（小林英夫・有坂秀世）。(4)音声表象・音韻観念（各別項）と同一の意味に（金田一<sup>キナイチ</sup>京助）、など。

# ↓音素

ここで金田一春彦は、いっいちの言語体系を形作る記号としての音。という表現を冒頭に掲げたうえで、「犬がいる！」ということばの、甲と乙の、ことばの音（＝具体音声）は正確には同一ではないが、その音の、中核として、《イヌガイル》という共通の音が抽象され、それが音韻だという。このことについて、金田一春彦は『日本語音韻の研究』（一九六七年 東京堂出版刊）で、『音韻は抽象的音声だ』と言ったのでは定義にならない。説明が不完全である。ただ《抽象的だ》というならば、池田前首相の2回の「もし

もし」から、〈池田前首相の「モシモシ」〉というオトを抽象することもできる。これも一種の〈抽象音声〉だ。また多くの人の内証話における「モシモシ」というオトを抽象することもできる。これも一種の〈抽象音声〉だ。つまり、抽象ということは、いろいろな観点から、いろいろな程度におこなうことができるので、ただ《抽象音声が音韻だ》と言ったのでは無意味である。《中核的なオトだ》と言わなければいけない。〈音韻〉というものはそういうものだ。つまりこれが音韻だといって、ころつとハダカにして示せるようなものではない。いわば一種の〈作業仮説〉である。と記していることは注目すべきである。そして、その音韻の例として、〔A〕では《イヌガイル》という文の単位のを示していることにも注目しておくべきであろう。金田一春彦は文単位のものも音韻としているのである。もちろんそればかりでなく、【特質】の部分では、一つの語の音韻は、原則として、音韻論的音節、またはモーラ（別項）に分節され、それらはさらに音素（別項）に分析される。と記し、語やモーラや音素の単位のものも音韻としている。すなわち単位が文であろうと語であろうとモーラであろうと音素であろうと、いっいちの言語体系を形作る記号としての音の〈作業仮説〉

としての《中核的なオト》ならば、それは音韻としていえるのである。「A」では、その後は諸説の列挙となり、それは【付記】の部分にも及んでいる。そのうちのアクセントに関しては、この「A」では音韻に含めないような記述になっている。前掲の『日本語音韻の研究』でも、音韻の面における最小単位を〈音素（＝フォネム）〉と呼び、アクセントの面におけるそれと平行的な単位を、〈調素（＝トネム）〉と呼ぶ。として区別している。ただ、音素およびその組合わせは、1語を他の語から区別するのに役立つ。それと同時に、調素およびその組合わせも1語を他から区別するのに役立つ。とし、『日本語音韻の研究』でアクセントに関する論文を9編収めていることからすると、音韻の中にアクセントにあたる調素を含めてもよいと判断されていることが分る。

「B」の「音韻」の項の執筆者は、「A」と同じ金田一春彦である。その記述は「A」とほぼ同様のものになっている。変えられている記述は次のようになっている。

- ・ 甲が叫ぶ「犬がいるー」ということばの音<sup>ナ</sup>（＝具体音声）→甲が叫ぶ「犬がいるー」ということばの音<sup>ナ</sup>
- ・ 同一の《犬がいる》という→《犬がいる》という同一の

・ 受け取っている。↓受け取り、現に書く時は同じ文字で書く。

・ 音声（別項）と呼ぶ→神保格以来具体音声と呼ぶ

・ 音韻と呼ぶ→音韻と呼ぶ

・ 音声は「」の中で包んで表記されるに對し→具体音声は「」または「」の中に包んで表記され

・ （横書きに）表記→横書きに表記

・ 【特質】の最後に記されていた音韻の本質は以下の部分→【特質】の前へ

・ 音韻論的音節、またはモーラ（別項）に分節され→限られた数の音韻論的音節に分節され

・ さらに音素（別項）に→さらに少数の音素に

・ 音素の連結→音素の連結（金田一春彦はこれを語音と呼ぶ）

・ アクセントに対して、以下の諸説の列挙部分→アクセントに対して、音素の連結の方だけを、「音韻」と呼ぶことも多い。「音韻・アクセント」と併称する場合の用法でこれは狭義の「音韻」である。これに對してアクセントを含めて言う場合は、広義の「音韻」である。また、音韻という語を一つの語の外形を分析して得られる単位

を呼ぶ術語として用いることも多い。有坂秀世はこのように考えて、音韻を(1)音素と(2)アクセントの型と(3)音節の境界を作る働きとの三種類と考えた。服部四郎は、(1)母音音素と、(2)音素をまとめる働きと、(3)アクセント素の三つとした。金田一は、(1)音素・(2)調素と、これらの間の(3)前後あるいは同時の関係、(4)主従あるいは対等の関係とした。アメリカの音韻論では、グリーンソン(H.A.Gleason)を例にとると、(1)子音・(2)母音・(3)半母音・(4)音節の切れ目・(5)ストレス・(6)ピッチ・(7)声の切れ目の抑揚の七種類としている。

・音声表象・音韻観念(各別項) ↓ 音声表象・音韻観念

この〔B〕では、〔A〕で「音声」とのみ表記していたものを「具体音声」と改めていることが分る。そのことによつて、音韻のあり方をより明確にしようとしたのではないかと判断する。すなわち、音韻は抽象的なものであることを強く印象づけようとしたのであろう。一方で「抽象音声」と表現することは避けられている。これは音声そのものが具体的なものであるからである。こうしたことからすると、「具体音声」という表現はくだいものになっているといわざるをえない。また、音素の連結を「語音」と呼ぶとするのはいかがな

ものか。さらに、〔A〕において見られた諸説の列挙が、この〔B〕でも行なわれている。ただ、その紹介にあたって、狭義の「音韻」≪広義の「音韻」≫単位を呼ぶ術語とまとめているのは、〔B〕においての進展の現れといえる。しかも、その音韻の語を「」でくるんで示すことによって、それぞれが諸説の一つであることを際立たせることになっている。「(別項)」の記述が〔B〕において削除されているのは、〔B〕の編纂作業において、〔A〕においてのような連携が不足していたことの現れなのではないかと判断する。

〔C〕では「音韻」の項の執筆を相澤正夫が担当している。そこには次のような記述がある。

**【定義・用法】** ある特定の言語・方言の構造を記述しようとするとき、音のレベルで相互に区別されるものとして抽出される単位。通常は、時間の流れに沿って継起的に捉えうる最小単位、すなわち分節音としての音素のことを指す。「日本語には母音が5つある」と言えば、暗黙のうちに音韻あるいは音素として5つの母音が区別されることを言っている。例えば「ア」という母音は、実際に音声として発せられるときは1回ごとに微妙な違いを見せるが、それ以外の「イ、ウ、エ、オ」と紛れるこ

となく区別される限りにおいて、同じ1つの音韻すなわち音素が実現したものと認められる。しばしば「日本語の音声・音韻」のように並置されるが、これは日本語の音的な側面について音声学的に客観的な観察を行うことと、その結果に基づいて音韻論的に妥当な分析を行うこととの両面を含んでいることを示している。この場合は、音声・音韻の両面について、分節音ばかりでなくアクセントやイントネーションのような韻律的特徴も含めて議論されるのが普通である。一方、「日本語の音韻・アクセント」のように並置されるとき音韻は、分節音としての音素あるいはその連続のみを指しており、アクセントなど韻律的特徴を含まない狭義の用法に従っている。また、反対に最広義の用法として、「日本語の音韻」のように言語の語彙や文法に対する音的部面の総称として用いられることも一般に行われている。

この「C」では、「抽象」「具体」や「心象」「現象」の語を一切使用していない。このことが定義にも反映しており、ある特定の言語・方言の構造を記述しようとするとき、音のレベルで相互に区別されるものとして抽出される単位<sup>2</sup>を音韻としている。音韻は「抽象的な音」でも「具体的な音」

でもなく「単位」だというのである。そして、通常は、時間の流れに沿って継起的に捉えうる最小単位、すなわち分節音としての音素のことを指す<sup>3</sup>としている。そこで、音韻あるいは音素と音韻と音素とが同じものであるかのような表現さえもしている。例として、「ア」という母音は、実際に音声として発せられるときは1回ごとに微妙な違いを見せるが、それ以外の「イ、ウ、エ、オ」と紛れることなく区別される限りにおいて、同じ1つの音韻すなわち音素が実現したものと認められる<sup>4</sup>。という記述がある。

ここでは、音韻すなわち音素<sup>5</sup>と両者を全く同じものと見なしている。また、「イ、ウ、エ、オ」のような他の音との区別で判断されるものが音韻だとされている。ということは、「実際に音声として発せられた音の音声学的違いをこえて同一とされるもの」(図1の<sup>6</sup>部分)ではなく、「他とは違うと判断されるもの」(図2の<sup>7</sup>部分)

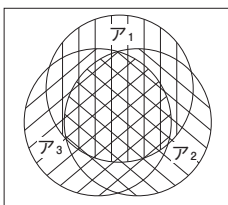


図1

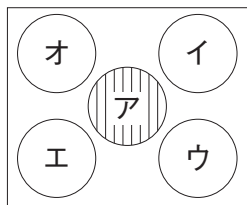


図2

を音韻として用いることになる。用法としては、「日本語の音声・音韻」「日本語の音韻・アクセント」「日本語の音韻」のように記された場合についての言及がある。「日本語の音声・音韻」のように並置されている場合、音声という具体的なものに對して、抽象的な音韻という記述がなされるかと思つたが、音韻論的な分析を行う<sup>レ</sup>と記述されるのみであつた。「日本語の音声・音韻」と「日本語の音韻・アクセント」の両者における音韻については、アクセントやイントネーションのような韻律的特徴をその内に含むものと、そうでないものの違いがあるとする。そこで「日本語の音韻・アクセント」の場合の音韻は狭義の用法とされる。そして「日本語の音韻」の場合の音韻は、<sup>レ</sup>最広義の用法<sup>レ</sup>で、<sup>レ</sup>言語の語彙や文法に對する音的部面の総称<sup>レ</sup>としている。引用部分の後に【音声表記と音韻表記】・【音素論あるいは音素設定の作業原則】・【日本語の音素とその体系・構造】・【研究史と課題】の小見出しのもと記述が続くが、そこにおいても「抽象」「具体」や「心象」「現象」の語は使用されていない。

### 三

前節で学会編纂の辞典における「音韻」の項の点検をした。これによつて明らかになったことや疑問は、次のような点であらう。

- ①《犬がいる》のような同一内容を甲・乙別々の人が叫んだ場合、その音は正確には同一ではない。しかし、その二つを同一のことばとしてわれわれは受け取っているという事実がある。
- ②「ア」という母音は、実際に音声として発せられるときは1回ごとに微妙な違いを見せるが、それ以外の「イ、ウ、エ、オ」と紛れることなく区別される。
- ③音声と音韻の違いは具体と抽象の違いか。
- ④《抽象音声が音韻だ》と言つたのでは無意味か。
- ⑤音韻は《抽象音声》のうちの《中核的なオト》か。
- ⑥音声は「」の中で包んで表記されるに對し、音韻は（ ）の中、または／＼の中に包んで（横書きに）表記されるのが慣例である。
- ⑦「具体音声」という表現はふさわしいか。
- ⑧音韻は文の単位、語の単位、さらに語を分節した音素の単位にも認められるのか。
- ⑨音素の連結を「語音」と呼ぶのはふさわしいか。

⑩ アクセントやイントネーションのような韻律的特徴も音韻に含めるべきか。

⑪ 音韻は「音」か「単位」か。

⑫ 音韻の本質は、心理的実在か、フィクションか。一種の〈作業仮説〉というべきか。

⑬ 音韻は漢字音の異称か。

⑭ 音韻は言語現象のうちの音的部面の総称として、語彙・語法の対となるものか。

⑮ 音韻は音素か。あるいは音素の連結のみが音韻か。

⑯ 音韻は音声表象・音韻観念と同一のものか。

⑰ 音節、モーラ、音素の関係はどう理解すべきか。

⑱ 音韻は(1)音素と、(2)アクセントの型と、(3)音節の境界を作る働きとの三種類か。

⑲ 音韻は(1)母音要素と、(2)音素をまとめる働きと、(3)アクセント素の三つか。

⑳ 音韻は(1)音素、(2)調素と、これらの間の(3)前後あるいは同時の関係、(4)主従あるいは対等の関係か。

㉑ 音韻は(1)子音、(2)母音、(3)半母音、(4)音節の切れ目、(5)ストレス、(6)ピッチ、(7)声の切れ目の抑揚の七種類か。

㉒ 調素をどう位置づけるべきか。

㉓ 音韻の狭義・広義・最広義という用法上の区別を認めるべきか。

これらを点検する。ともかく音韻の定義が曖昧である。英語の *phoneme* は、『研究社 新英和大辞典 第五版』（一九八〇年 研究社刊）では『音声』音素、音韻（一つの言語において意味を区別する働きをする音声上の最小単位：/v/, /s/ のように / / で囲んで示す：cf. *diaphone* 3）、とする。「音素」と「音韻」の訳語を並べてみて、どちらも *phoneme* だとしているのである。しかも、( ) 内に示されている説明は「音素」のものである。これでは「音韻」の訳語は不要ではないか。cf. として示されている *diaphone* 3 については、『音声・言語』類音（同一音の個人的・地方的・文体的変種の総称。例えば *home, go* の母音には [o:] [ou] [au] [ʌv] などの変種があるが同一の *diaphone* に属する：cf. *phoneme*）と記している。こちらは音素の違いを指摘していて、その違いを越えて同一と認める音韻がありうることを示している。

フェルディナン・ド・ソシュールは、「言語活動（ラングーージュ）」をその社会的側面の「言語（ラング）」と個人的側



面の「言（パロール）」に分けてとらえることや、「通時言語学」と「共時言語学」の区別、「概念」と「聴覚映像」の結び付きの恣意性、言語の線状性の指摘など、言語の基本的なとらえ方を示したことで高く評価されている言語学者である。その考えは、その門下生の筆録をもとに編纂された『一般言語講義』（原著一九一六年刊）という書によって伝えられている。そのソシュールの言及はどうかを見るに、その翻訳において phonème を小林英夫は「音韻」とし（『ソシュール 一般言語講義』一九七二年 岩波書店刊）、町田健は「音素」としている（『新訳 ソシュール 一般言語講義』二〇一六年 研究社刊）。ソシュールにおける phonème は、「単位」としていることから「音素」とすべきである。そこで①についてであるが、音韻は「単位」ではなく、あくまでも「音」である。そのため「C」の定義で「単位」とするのにもふさわしくない。この「C」の「単位」とする定義は、ソシュールの小林英夫訳をふまえたものであるうが、phonème の訳としては町田健の方が正しく、それに従うべきである。

「音韻」とされるものは、『イヌガイル』（イヌ）（ヌ）（イ）（nu）（n）（u）のようなもので「音」である。その「音」は個別的な違いを越えて同一ととらえられる抽象的な

ものであり、別種の「音」との弁別を可能とする性質をそなえているものである。そこで①で指摘されていたような同定がされるものであり、②で指摘されていたような弁別がされるものでもあるのである。①②は共に事実である。音韻は人々の頭脳に記憶されたことばの音の観念である。それは、それぞれの人の経験によって獲得された抽象的なものである。それだけに、人によってその実体には異なる部分がある。さらに発声器官の構造上の差やその使用法の差といったこともある。けれど、それが具体的な場面で運用された時に他者がその表現内容を理解できるのは、その話者と他者との観念に共通しているものがあつたからである。それを可能にしたのは、両者が所属する社会の言語に通用部分が存在したからであろう。『イヌガイル』の場合でいうと、『イ』は具体的な表現は「 $i_1$ 」「 $i_2$ 」「 $i_3$ 」…のように表現者によって音声学的には異なるものを含んだ違った音になっているが、その「 $i_1$ 」「 $i_2$ 」「 $i_3$ 」…には「イ」ならではの共通する部分を持つていて、それらが同じ音韻（イ）の表現と認められる。これが同音識別である。こうした同音識別は（ヌ）（ガ）（イ）（ル）についても認められる。また、こうした同音識別は単音の単位ばかりでなく、語の単位（イヌ）（ガ）（イル）に

においても、《イヌガイル》という文の単位においても認めることができるのである。一方、《イ》と《ヌ》の両者については、そのような同音識別はできず、両者の差異がはっきりしている。そこで両者の異音識別が可能となる。このことは《イ》と《ガ》、《イ》と《ル》、《ヌ》と《ガ》、《ヌ》と《ル》、《ガ》と《ル》についても認めることができる。さらに、このような差異の識別は単音の単位ばかりでなく、語の単位・文の単位においても可能であろう。語の単位では、同じ「イ」でも「居る」の意の場合と「要る」の場合があり、アクセントを異にすることで違いを明らかにしていることがある。また文の単位では、「大が居る」と言う場合、文末の抑揚によつて肯定文にも疑問文にもなることがある。その他、曖昧音の問題についても考慮しておく必要がある。たとえば《ア》と《エ》に対してそのどちらともいえない音が発せられることがある。その場合の識別は、単音の単位ではなく語の単位や文の単位での判断が必要となる。

③については、音声と音韻の違いの最も大きな点は具体と抽象の違いであるといつてよい。

④については、金田一春彦が『池田前首相の2回の「もしもし」』から、『池田前首相の「モシモシ」』というオトを抽象

することもできる。これも一種の《抽象音声》だ。と記していたように、個別的な性質を持った音声の抽象化されたものも存在することから、全くの無意味ではないが、定義としては不十分であるといわざるをえない。また「抽象音声」という表現には、音声そのものは具体的なものと同様に抵抗を感じる。

⑤については、「抽象音声」という表現にやはり抵抗がある。それを確認したうえで、金田一春彦が音韻を『ただ《抽象音声》が音韻だ』と言ったのでは無意味である。《中核的なオトだ》と言わなければいけない。としている点には注目したい。異なる人の発した「イヌガイル」という音声であっても、それが同じ《イヌガイル》ということを言っていると判断できるのは、その異なる人それぞれの音声に「中核的なオト」の存在を認めることができるからに他ならない。金田一春彦が「抽象音声」の「中核的なオト」であるとしていた音韻を、有坂秀世は『音韻論 増補版』（一九五九年 三省堂刊）において「目的観念」と表現し、『発音運動の理想でなければならぬ』としているが、話手の意図を重視したもので、聞手の側についての配慮を欠いている点で不十分といわざるをえない。ただし、『変幻出沒定めなき現実の音声

現象の中に何らか一定不変の（すべての人すべての場合を通じて変らざる）性質が含まれてゐるかの如く考へることがそもそも大きな妄想なのである。〴〵という指摘には首肯させられる。「中核的なオト」は、社会的には確として定まつてゐるものではなく揺らいでいるのである。また〴〵そもそも、音韻観念は、我々が過去に於ていろいろの人から聴いた無数の音声の印象の蓄積から生じたものである。〴〵という指摘も、個人差が生ずる原因として当然のものである。

⑥については、音声と音韻の表記の仕方を示しており、分りやすい区別といえる。

⑦の「具体音声」については、④⑤の「抽象音声」に対して抵抗を感じたように、「音声」そのものが具体的なものであることから、くどい表現といわざるをえない。

⑧については、「A」での『イヌガイル』の例や「モシモシ」の例などから、音韻は文の単位、語の単位、さらに語を分節した単音の単位のものにも認められるものと判断する。

N. S. トウルベツコイは『音韻論の原理』（原著は一九三九年刊、長嶋善郎の訳本は一九八〇年に岩波書店刊）において、音韻の単位の大きさは非常に様々なものであり得る〴〵と記している。文単位の音韻を「文韻」、語単位の音韻を「語韻」、

単音単位の音韻を「単音韻」と称すればいいのではないか。

「単音韻」はさらに「音節韻」「拍韻」「音素韻」といった区分が可能である。

⑨については、「音素」の連続は必ずしも語にはならず、音節に止まつたりすることからふさわしいとは判断しない。

⑩については、アクセントやイントネーションのような韻律的特徴も語の識別や文意の区別にかかわることから音韻に含めるべきであろう。それについて、「調素」と称することが金田一春彦の『日本語音韻の研究』に示されていたが、それを用いてよいのではないか。ただし、その「調素」とするのは、アクセントのみとするのではなく、イントネーションや間も含む術語として使用したい。

⑫については、金田一春彦は〴〵これが音韻だといって、ころつとハダカにして示せるようなものではない。いわば一種の《作業仮説》である。〴〵と記していた。言語学がソシュールの言う「言語（ラング）」にあたるものを重視する学問であるとするならば、音韻もその社会的側面から定義しなければならぬ。「一種の《作業仮説》」という表現は、まさにその結果なのであろう。社会という集合体には心理があるわけではないので、社会に心理的実在があるわけではない。そこ

にあるのは、その社会を構成する個々人の抱く概念の集合ではない。その共通部分は推測は可能であろうが、確としたものではなく、曖昧さも必然的に存在する。それゆえに、個人の集合体である社会に「中核的なオト」としてあるであろうものを示すことは「作業仮説」といわざるをえないのである。そうしたものが音韻の本質であることから、フィクションと言ってもいいものであることはわきまえておかねばならない。音韻の心理的実在があるのは、各個人の脳髓の中である。その各個人における音韻の心理的実在は、その各個人の置かれた環境内での言語経験の積み重ねによって成立する。

そのため、各個人によつて音韻の心理的実在の内容には違いがある。その違いのゆえに、実際の言語活動においては少なからず摩擦が生ずる。けれど、そうした摩擦を乗り越える努力を各人がすることでコミュニケーションが成立しているのである。そうはいっても、各個人の脳内における心理的実在にも曖昧さがあることは心しておく必要がある。金田一春彦の表現を借りるならば、脳内のものであるだけに、こころとハダカにして示せるようなものではない。のである。

⑬については、たしかに中国語学においては漢字音の異称として「音韻」の語が使用されている。その「音韻論」では、

漢字一文字ごとの音の分析が中心となっている。中国の漢字は一字が一音節を表わす。しかもその一字が語に相当している。そのことから中国語は単音節言語といわれ、その文字は表語文字といわれている。その一文字で表現される一音節は、声母と韻母と声調で構成されている。声母は語頭子音、韻母はそれに続く部分で介音・主母音・韻尾の組み合わせからできている。声調は音節の高さ変動を示す型である。こうした音の抽象概念を「音韻」と称しているのである。しかし、そうした一字一字の漢字音は、私見の「語韻」と「調素」に相当するものである。「語韻」や「調素」もたしかに音韻の一部ではあるものの、音韻のすべてではない。中国語学における「音韻」は、私見の音韻の一部とみなす。音韻は「語韻」と「調素」のみではなく、「文韻」「単音韻」「音節韻」「拍韻」「音素韻」に区分が可能」として表現される音をも含んだ総称としておきたい。

⑭の「音韻は言語現象の音的部面の総称」というのは、「現象」の表現が問題である。「現象」とは可視化されたものである。そのため心象である音韻にはふさわしくない表現である。そこで、あえて言うならば「音韻は言語心象の音的部面の総称」とするべきである。さらにそれを語彙・語法の対

とすることは、語彙・語法があくまでも語の単位のみについてのものであることから、語だけでなく文や単音についてのものとも考えられる音韻とは拠っているものに相異があり、ふさわしくないと判断する。

⑮については、音韻が「単位」ではなく心象における「音」であることから、音韻を「音素」という単位としたり「音素の連結」という単位とすることはいずれもふさわしくない。服部四郎は「音韻論」(『国語学』二二輯 一九五五年『日本の言語学 第二巻 音韻』所収)において、音韻(音素)と記し、音韻と音素を同じものと扱っているが、これも同じ理由からふさわしいものとは判断しない。

⑯については、音韻を「音声表象」とすることは、音声が具体的なものであるため、抽象的な音韻にはふさわしくない。また「音韻観念」は、音韻が観念であることから同一と言えなくもないが、音韻と観念を合わせて使うことは意味のダブリを含んだ表現となりくどいものとなる。

⑰については、「A」に次のような記述がある。「音節」の項は金田一春彦が執筆担当で、それぞれ自身の中に何らの切れ目が感じられず、その前後に切れ目の感じられる単音の連続一つの単音から成ることもある。としてゐる。「モーラ」と

「音素」の項の「A」についての執筆担当は服部四郎で、「モーラ」は子音音素と短母音音素との連結、あるいは、それに等しい長さを有する音素あるいは音素連結。日本語(東京方言)では、[koto] /koto/ (琴)・[ko:] /koo/ (甲)・[kon] /kov/ (紺)は、音声的にも音韻的にも、それぞれに二音節・一音節・一音節であるが、いずれも長さがほぼ等しく、二モーラから成っている。すなわち、この例では、/ko:/ /o:/ /o:/ /n/などの音素連結および音素が、それぞれ一モーラをなしている。とし、「音素」は最小の音韻的単位としてゐる。これによって、この三者においては音節が最も長い単位で、モーラがそれに次ぎ、音素が最も短い単位という関係になっていると理解してよいのである。なおモーラについては、亀井孝は「拍」と表現している(「音韻」の概念は日本語に有用なりや『国文学攷』一九五六年、『亀井孝論文集Ⅰ 日本語学のために』所収)。モーラと表現したのではイメージが湧きにくく、「一拍」「二拍」といった長さにかかわるものであることから、亀井孝が称えた「拍」のほうがふさわしいと判断する。

⑱⑲については、音韻の種類に関するものである。⑲については、音韻の狭義・広義・最広義といった用法上の区別

が「B」や「C」で示されていることがある。しかし、「用法上の区別」は音韻ではない。狭義・広義・最広義と区別され示されている単位に含まれている「音」のすべてこそが音韻の名で呼ぶにふさわしい。そうであるならば、それらすべてを音韻とし、それらの総称も音韻であると認めるべきである。「用法上の区別」をすることは認めてよいが、音韻のそれぞれについて、文単位におけるもの、語単位におけるもの、単音単位におけるものにおいて、その在り方を考えるべきであろう。そこで音韻の種類分けであるが、その最も大きなものは、音本体によるものと韻律的特徴によるものの二大別である。そのうちの音本体によるものについては、文単位に該当するもの、語単位に該当するもの、単音単位に該当するものの三種類に分けられる。そのうちの単音単位に該当するものについては、さらに音節韻・拍韻・音素韻の三種の単位に含まれるものに分けられる。また音素韻に含まれるものについては、子音音素・母音音素・半母音音素・拍音素などの単位に含まれるものに分けられる。一方、韻律的特徴によるものは、まとめて調素と表現できるもので、高低・強弱・連接・間の四種類に分けられる。この韻律的特徴による種類分けは、文単位・語単位・単音単位のそれぞれによって表われ

方が異なる。文単位のものには、文末の上げ下げといった高低をあらわすイントネーションの型に分類されるものと、文中での強弱をあらわすプロミネンスの型に分類されるもの、それに語の連接や間のとり方に関するものがある。語の単位のもの、アクセントの型として分類されるが、それには日本語の場合のような高低のものと、英語の場合のような強弱のものとの違いがあり、言語の種類によって決っている。単音単位のもの、中国の声調の型に分類されるようなものが該当する。<sup>②②</sup>の調素の位置づけは、このようであるべきだろう。<sup>①⑧</sup>で音韻を「(1)音素と(2)アクセントの型と(3)音節の境界を作る働きとの三種類」とすることには賛同できない。《イヌガイル》のような文単位のものや、《イス》のような語単位のものも音韻としてとらえるべきであると考えからである。また音韻を「音素」と単位としてとらえることも賛同できない。音韻とは単位ではなく「音」である。その「音」は、金田一春彦が表現した音声の抽象化されたものの「中核的なオト」のようなものとみなすべきである。「アクセントの型」は、そうした「中核的なオト」を構成する要素の一つといっているものである。イントネーションやプロミネンスが無視されているのは、文単位のものだからであろうが残念で

ある。それに「音節の境界を作る働き」は、「中核的なオト」を構成するものではなく、その働きを示しており不適当といわなければならない。「中核的なオト」を構成するものとしては連接と間を取り上げるべきであろう。<sup>⑭</sup>については、子音素を挙げていないのが不思議で、そのみによっても不十分なものである。さらに韻律的要素をアクセント素のみとするのは、イントネーションやプロミネンスの存在や間の存在を考えると不十分である。「音素をまとめる働き」は連接の一部にあたるものである。<sup>⑮</sup>の「前後あるいは同時の関係」も連接のことを言っているものであろう。「主従あるいは対等の関係」は文の構成要素の関係を示すものであり、音韻に含めるべきものではないと判断する。<sup>⑯</sup>の「音節の切れ目」は、間としてとらえるべきであろう。「ストレス」は強弱、「ピッチ」は高低のことで、アクセントの型やプロミネンスやイントネーションに関係するものである。「声の切れ目の抑揚」は、間とイントネーションとに分けてとらえるべきものであろう。

#### 四

以上の点検をもとに私見をまとめるならば、音韻は作業仮説される言語心象の聴覚的部面に相当する《音》の中核的なものの総称となる。デカルトの「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」(『方法序説』原著一六三七年刊、谷川多佳子訳・岩波文庫 一九九七年刊)の言葉で表現されているように、人間が実在を確信できるのは自らの内においてのみである。それ以外の外界にあるものは、その実在をもととした推測によって認識するしかない。その意味で、社会的側面における音韻は作業仮説という推測によって認識されるものである。そういうものである音韻は、音声の個別的な違いを越えて同一ととらえることとなる観念であり、さらに別種の《音》との弁別を可能とする性質をそなえている観念でもある。その種類は、音本体のものと韻律的特徴によるものに大別される。そして、そのいずれにおいても文単位のもの・語単位のもの・単音単位のものに分けることができる。そうしたものと音韻を定義できたところで、最初に提起した問題の「音韻と音声との区別における音韻に擬せられるのが字体である」が妥当なのか考えた。その結果、それは必ずしも妥当とはいえないのではないかと思った。たしかに字体と字形の関係は、音韻と音声の関係のように、それぞれ抽象



と具象の関係になっていて、擬せられてもおかしくないように思われる。しかし、字体は音韻のような大くくりのものを対象としていない。それに、表語文字といわれる漢字の字体は素材的には語単位のものであり、表音文字といわれる平仮名や片仮名の字体は素材的には単音単位のものである。そのことから、音韻が文単位のもの・語単位のもの・単音単位のものすべてを含むものであることは明らかに異なるのである。それでは、文字に関して音韻に該当する概念は何と称せられているかというと、それが見当らないのである。字形は音声に該当するのではないとも言われる。たしかに字形も音声も共に具象的なものである。しかし字形は、言語心象の視覚的記号による表現を個別の形で示したものである。それに対して音声は、言語心象の聴覚的記号による表現をとりまとめたものであって、それは個別の形ではないのである。聴覚的記号による表現の個別形にあたるものは「音声形」というように表現するものとするべきであろう。一方、言語心象の視覚的記号による表現をとりまとめたものこそが「文字」である。

では、文字の音韻に該当する術語にはどういう表現がふさわしいか。私はその術語として「字映」を提案したい。音声

についての「音韻」が「音のひびき」という聴覚的性質によって名付けられているならば、文字についてもその視覚的性質をふまえたものになりたい。そして、「字のうつり」ということで「字映」という表現はどうかと考えたのである。そこで最初の問題の表現にもどるならば、音韻と音声との区別における音韻に擬せられるのは「字映」であるとすべきと考えた。その「字映」としてまとめられるものには、文単位のものである「文映」、語単位のものである「語映」、単音単位のものである「単字映」が含まれるとするのである。

音韻における調素にあたるものは、字映においては何と称するのが適当であろうか。音韻の場合には「しらべの素」として「調素」とまとめられたが、字映においては「えがきの素」として「描素」としてまとめることを提案したい。「描素」に含められるものとしては、様々な符号をあげることができる。「？」はイントネーションにかかわり、「！」や太字・傍線などはプロミネンスの表現に、そして句読点は間を明らかにする符号といえるのではないか。

私は、こうした術語やその用法の点検がおろそかにされていると感じている。私の提案したものが、学会として認められるかどうかは分らない。しかし、こうしたことの点検が常



時必要であることは間違いないと信じている。

(まさき・よしひろ 昭和50年度成城大学大学院

文学研究科 国文学専攻・博士課程修了)